

「六町エコプチテラス」から学ぶ

すぎなみ大人塾 09年度・夜コース

すぎなみ社会デザイン塾 第3回 09年7月29日(水) 19時より

講演：「エコプチテラスとつながり」

講師：平田裕介さん

一般社団法人 環境パートナーシップ会議 (E P I C)

企業とNPOのパートナーシップ事業担当

学習支援者：新谷大輔さん

みなさんこんばんは。こちらの大人塾で学習支援者をしております新谷と申します。今日の公開講座は、平田さんにゲストをおいでいただいております。平田さんと私とのご縁は、数年前に足立区の「六町エコプチテラス」に公募したということから始まりました。その後、彼は立教大学の大学院へ進学されて、私はそこで講義を持っていて、2年間ほど私の授業を取っていただいております。

平田裕介さん

1 始めに

ご紹介いただきました平田裕之と申します。いろいろなことをしておりまして、会う場面会う場面で「の平田さん」と言われています。東京都環境局の地球環境パートナーシップの他に、渋谷にあります国連大学と、環境省が1996年に開設した地球環境パートナーシッププラザ (GEIC) に勤務しています。

今日お話をさせていただくのは、つながりに気づきつながりをつくるです。「エコプチテラスとつながり」というお話をさせていただきたいと思います、また、コミュニティーガーデンという話をしたいと思います。

コミュニティーガーデンという言葉始めて聞いたという方がほとんどそうです。今日はコミュニティーガーデンとは何なのか覚えて帰ってください。コミュニティーガーデンと区民農園との違いとは何か、コミュニティーガーデンというのは、コミュニティー「地域」、ガーデン「庭」地域の庭です。

私たちの活動は2002年から始めて、活動していることが「これはコミュニティーガーデンだ」と言われ始めて、2004年あたりから段々と意識が上向いてきます。サンフランシスコでも似たようなものがある、ニューヨーク、スペイン、ドイツ、イギリス、ボスニア、キューバでも、いろいろな都市部に緑地を作り生産農場を作るという状況がおきている。

その目的はさまざまで、例えば刑務所に入った人が社会復帰のプロセスで野

「六町エコプチテラス」から学ぶ

菜づくりをしたりとか、身体、精神的な障害をもっている人が社会復帰する為に癒されることを狙ったりする。ボスニアでは民族紛争が起きて、民族対立が地域として止めるために緩衝材としてコミュニティーガーデンがある。

私たちの場合、区民農園があります。畑というのは食糧生産の場で、ものを作っていき、食料を確保する場と考えていましたが、畑を作っていくことはそれ以外にも色々な価値があるという事をやっていくうちに分かりました。

本日のテーマは人と人がつながって行く事に価値があるよというお話です。私の個人的な思いからすると、今から10年前の20歳代の時に日本全国の、今で言う僻地、限界集落を中心に巨樹や老木の絵を描く旅をしました。樹の目の前で座ってテントを張って寝袋で、時には1ヶ月くらい絵を描いていました。北から南まで100本くらいの樹を描いて来ましたが、その結果何が分かって来たかと言うと、私が見てきたすべての巨樹が、その一本だけで巨樹足りえることがなかった。そこに種を落とす鳥、虫をついばむ鳥であるとか、色々な生態系があります。それから、樹が切られなかった歴史があります。これは縄文杉で豊臣秀吉の時代にお寺の屋根瓦にする事が良いとされて、ことごとく縄文杉が切られましたが、この屋久杉はあまりにも曲がっていて価値をなさなかった為に切られませんでした。

それぞれの巨樹に伝説や言い伝え、自然観があり、それがつながって巨樹を巨樹たらしめて行く。1つの命を超えた時には神々しい、時にはおどろおどろしい、私たちの人智を超えたものに見せる様々なつながりというものがあり、巨樹を見ると私たちの生きている日本というものの深さや考え方まで見えてくる。

そういったことが、私がこれからお話するコミュニティーガーデンにつながる「何の価値があるのか」というアプローチになっています。学生時代にアメリカへ留学した時に、激流を下るラフティングのガイドをしたことをきっかけに、アウトドアから色々な環境問題に興味を持ち始めました。海岸へ行けばごみが捨てられている、山奥へ行けば沢が堰で止められている、色々なことが起こっていて遊び場がどんどん面白くなって来ているということから、環境問題に思考がヒットして今に至っています。

2 本日のテーマ：つながることに価値があるのか

今日のテーマは空き地を交流拠点にする話です。まず、区民農園とコミュニティーガーデンの違いですが、区民農園は区民のリクリエーションという位置づけで、おもに野菜づくりを行っています。区民農園、市民農園は個人が借りて、1年や2年野菜作りをする。それではコミュニティーガーデンとの違いは何か。大きな違いは、あくまで人と出会うきっかけが主な目的で、野菜作りが目的ではないということです。主な目的は地域交流が目的で、野菜づくりは手段に過ぎ

「六町エコプチテラス」から学ぶ

ない。

今の季節でしたら、ナスやきゅうりを畑で作ることが、その場に毎日集まるきっかけになります。色々なことをして交流して行く地域の交流館という事で、その場所で用意されているはイベントや人が出会う「場」です。イベントとしては、菜の花祭りがあり、ジャガイモの収穫祭、色々な四季折々の生活があることが大きな違いと捉えています。

区民農園はたくさんありますが、とにかく苦情が多いそうです。区民農園の借主が車でやって来て路上駐車したり、たくさん農薬をまいたり、中でいじめが起こったり、色々なことが起こったりしています。私たちはコミュニティーガーデンを5年半やりましたが、苦情が出たのは2回です。一回は蚊がすごく湧いているのではないか？というクレームがあったのと、2回目は今くらいの時期ですと5時くらいから明るいので人が集まって来て騒ぐというクレームがありました。

去年の2008年4月でこのコミュニティーガーデンの活動を終了させた。5年半の1クール活動でした。コミュニティーガーデンは行政が作ったものを私たちが管理したのではなく、「やりましょう」という提案から、実際に自分たちが汗を流して畑等を作り、そして最後に土地施設を現状復帰して活動を終わりました。コミュニティーガーデンの場所は、足立区の六町と言う所です。秋葉原から筑波までつくばエクスプレスで15分の場所です。

私達の住宅街はそれまで23区の中で、もっとも交通の便が悪く、もっとも地価が安いところといわれていましたが、そこに突然に電車が出来て秋葉原まで15分になり便利になりました。つくばエクスプレス開通に伴い、これからこの町は発展するだと1990年に区画整理をして町全体を発展的な町にしようという計画が持ち上がりました。

ところが、この計画は当時15年くらいで終わる予定でしたが、途中バブルがはじけまして思うように予算が取れなくなり、予算がなかなか確保できないこともありました。区画整理は町の道路や道路の下にあるライフライン等の整備が大きな目的ですが、生活している人々は工事が進んだら、今住んでいる家を立ち退き仮住まいしてもう一度帰ってきて家を建てます。

問題はこの期間がどのくらいかかるかということなのです。ある人は移転するのに1年仮住まいです。ある人は15年仮住まいします、ある人は20年かかるとします。この地域に多い年齢層は60代の人たちでした。20年間、仮住まいしてくださいといわれ、20年目に帰って来て自分で家を建てると80歳ですが、80歳で自分の家を建て直す事が出来るのでしょうか？実際に仮住まいしている間に亡くなった方もいました。

こういった区画整理事業が行われてたくさんの区画整理事業用地が出来まし

「六町エコプチテラス」から学ぶ

た。空き地が出来るとどうなるかという、人が空き缶を捨てたり、ビンを捨てたり自転車を捨てたり、雑草が2メートルくらい生えたりします。近所の人々が区へ苦情を言うと業者が来て草刈をする。そこにかかる費用は60万円もする。私は日本全国の巨樹の絵を描いて戻って帰って来た時に、仕事をしながらふと見てみると空き地が在るのはもったいないのではないか。このようなことをして税金が雑草を刈るためだけに使われているのならば、そこを地域の畑として開放でもしてあげれば良いのではないかと思ったのです。

ところが話は簡単にはいかず、区画整理のために取得されている土地を目的外で使用してはいけなると地方自治法に定められています。なかなか他の事には使えない。行政的な言葉で言いますと、正式には空き地では無く区画整理事業地なのです。道路ならば道路用地、学校の為ならば学校建設用地ですから目的があって取得しているものです。区画整理の為に土地が税金を使って駐車場になって誰かの懐を暖めては問題です。あくまでも区画整理の為に区民の税金を払って買った土地ですから、区画整理の為に使われるのが正論です。

しかし現実として区画整理用地は空き地の為になんの役にたっているのか？ 地域の人たちは生きがいをなくし、草は生え、しかもこの状態が7年つづいていたので、何十年も続く可能性があります。私は何とかしたいと話をもちかけようと思ったのですが、どこに持ちかけてよいのか分からないので、始めはクお地域支援課に行き、リサイクル課に行けと言われてリサイクル課に行き、リサイクル課では教育委員会に行けと言われて教育委員会に行き、いろいろな課に行き回ってきて色々なところに出かけましたが、最後に行き着いた課がまちづくり課でした。

そこでも難色を示しましたが、中にそういったことに非常に共感を示してくれる職員がいました。何とかしましょう。知恵を絞ってみましょうということで、足立区は面白い条例がありました。足立区プチテラス要綱があったのです。住宅地造成により、公園にもならないような小さなエリアができる、ここにベンチを置きましょうというのがプチテラス要綱です。プチテラスは、区内に100箇所くらいあり、その要綱を使えば出来るかもしれないという事で知恵を絞っていただきました。

これは今にして思えばグレーゾーンの部分を含みます。足立区の場合はプチテラス要綱があるので、本来は区画整理の為に取得した土地だから目的外使用できないけれども要綱を元にこの用地を暫定的期間にエコプチテラスという実験場をやりたいという話になりました。

「六町エコプチテラス」から学ぶ

3 エコプチテラスを活用した環境活動

プチテラスの前にエコの 2 文字を付けるのは、すごく大変な知恵だったようです。つまりこの区画整理の事業について、役所としては区画整理事業用地だから筋として用地使用外使用は出来ない。しかし、エコプチテラス要綱により、一時的な活用方法として条例的にはきちんと管理されている事を示せる。その様な形で用件は整いました。

行政と市民両者がお互いに不満を言い合っているだけでは、中々そこに成果を見出すことは出来ません。大切なのは、話し合いの場でどの様な可能性を見るか、どの様な資源があって、どの様に資源を活用出来るのかを思い描いてゆく力と、思いを実現する人が重要になります。結論から言いますと、草が 2 メートル生えている現場で、当時のまちづくり課係長さんが本当にやるのですねといわれました。足立区は許可をしますが金は 1 銭も出しません。作業的な協力もしません。協力は許可を出すところまでです。本当にやるのですかと聞かれ、私はやっぱりやめまると言いたかった。芝刈り機を買ってきて、道路ぎわの敷地があるところから草むしりを 1 人で始めて、奥までやって振り返ったら元の雑草が 2 メートル生えている夢を 2 回も見ると、2100 平米は物凄い広いところなのです。親戚の人にトラクターを借りたいと思って、その場所を見てもらったら 7 年間も雑草が生えていたら、「ひろちゃんね のまれちゃうよ」と言われました。「何ですか のまれちゃうって」と聞いたら、「土地にのまれちゃう」という言い方をしました。

つまり雑草が 7 年間生えて、その根にトラクターの歯が入らないというのです。土壌をひっくり返しながらすべて手作業でしなければいけない。そんなことしたら死んじゃうよという理由でのまれちゃうと言われました。おぼれるものは藁をもつかむといいますが、隣の農家のおじさんが「全部を見ては駄目だ」と、「山を登るときに頂上を見て登る馬鹿がいるか、足元を見なさい」と言われました。足元の草をむしれば次の草が見えてくる。次の草をむしれば次の草が見えてくるそれでいいのだと。

私はその言葉にすがる、高校の時の同級生と私の母から町会長さんに頼んで回覧板を回してもらっていながら、10 人くらいで始めました。始めてみると不思議なことが起こりました。近所の人「何をしているの」と、聞くのです。「この空き地で畑をやるのです」と答えると「ふーん」と言って帰っていきました。もう一度きた時には自分で長靴を履いてシャベルを持って「わたしも仲間に入れてくれ」と、猫の手も借りたいので「いいですよ、ただし条件があります。自分で作る区画は自分で掘って下さい」足立区と同じに「私たちは何もしませんよ。やる権利だけは渡します」といいました。

「六町エコプチテラス」から学ぶ

また次の人が来て「なにやってんですか」「条件は自分で耕すこと」そうすると、段々と口コミが広がって次から次へと人が集まってきて、中には80歳過ぎぐらいのお爺ちゃんが「私にやらせてくれ」というのです。しかし、どう考えても自分では耕せる様な元気な感じではないのです。わたしも鬼のように「すみません！駄目です、自分で耕せない人は申し訳ないけど、ここではやれないので申し訳ない。ごめんなさい」と謝りました。しかし、彼は次の日も来て「すみません、やらせてくれ！私の面倒は家族が見ます」と2回も言われて、2回も断ることもできず「どうぞ」と言いました。

彼は、私にはとても畑を耕していけるような感じではなく、ひ弱な感じに見えました。しかし、その方はスコップの販売をしていた。すき込み用の細長いスコップを持ってきて、私たちが格闘して困っている所をさくっと耕して、2週間、1ヶ月たつと畑を耕するのが一番上手くて他の人が、彼に助けられている状況になりました。

私たちは、手探りでやっていくうちにどんどん人が来て、はじめは1人で耕してその後どうしようと思っていたものが、2週間で7年間放置されていた2,100平米の土地を耕すことが出来ました。鉄製のスコップが1本折れました。皆が各自スコップをそれぞれ手弁当で持って来ているのです。一応、畑の形が出来て来た頃に「何か座るところが欲しいよな」、日陰のないところで立っているのはつらい。トイレも自分の家へ帰れば良いですけども、「テーブルが欲しいよな、どうせ作るなら中華テーブル風がいいな」ということで、「そういえば俺の工事現場で電線を張るコードもある」「じゃあトラックあるから持ってくるよ」と持ってくる人、「トラックで持って来たら、俺が作ってやるよ」というサッシ職人さんがいて、「中華テーブルは上のテーブルが回るんだよな」、「おれがキャスター持ってきてやるよ」。そんなことをしているうちに中華風円卓テーブルが出来てしまいました。

そのうちに活動していくと、今度は冬になりまして、霜が出ます。歩くと土が長靴にくっついて、道路が汚れてしまうので何とかしようと、ウッドチップを区がりサイクルしているのをそれを取りに行けば無料なので、自分たちでウッドチップを運んで道にひきました。段々と行動を起こしていくうちに、ベンチ、棚、畑の道を歩くひき、いろいろな必要なものが出来てきました。私たちに限りなくあったものは時間でした。週末は誰かしらがお茶を出したり、あれが足りないこれが足りない、お金がないとお金はどうしようと、空き缶を集めて売ろうということになり空き缶を売ったりしました。

何も無いという状態が明らかだったので、出来る人がいろいろな意見を出していく。ある人は水がないので自分の家で雨水を溜めて運んだり、近所の方に園芸部長をしていただいて、畑の配水をしてくれました。また、生ごみをリサ

「六町エコプチテラス」から学ぶ

イクルしようと、家庭から出る生ごみをここで計って堆肥にしました。また、活動をノートに記録して行政に、定期的に報告しました。

円卓会議の様子ですけれども、毎月 1 回・全体会議という会で、主な目的は楽しみの中で環境を学ぶという会合だったのですけれども、一旦は 7 年分の草は無くなりましたが、種が落ちて生えてきますからどんどん草が毎日生えてきます。業者に頼むと 60 万円で草むしりをしてもらえますが、私たちが運営するようになって草が生えなくなったかという、まったくそんなことはなく同じ草は生えるわけです。それを自分たちで活動資金も集めながら、草むしりをしていくわけですが、毎月一回は環境のことを考えようということで会合が生まれました。

私が環境の話をしようと思っても、話を聞いてくれないので、なんとか楽しみながら 3 分間の環境話の中で 1 つのことを覚えるようにしようとうようにして話をしました。学生さんが時々遊びに来て、コミュニティーガーデンとは何ですか？とか、いろいろな街づくりの話を聞きに来ます。私がいつも話をしているわけではないので、地元の人たちがいろいろな話をします。

我々全員が環境問題について、ヒートアイランドや温暖化について話を分かっていたわけではありません。NPO であるということも良くは分かっていた。「俺たちは全部ボランティアでやっている。ここは PKO だから」「なんでですか PKO って」「NPO だよ」って話です。

やっていることは良く分からないが段々と色々な人が来る。なぜ自分たちのことなどを見に来るのか。そういった話をしながら、私たちのしていることは、社会的な意義があるという所まで分かるように少しずつ時間を重ねながら、考えていく、感じていく。

先ほど私たちはヒートアイランド対策ということで、棚を作って木陰を作って涼しくしますという話をしました。これが結果的に出来たものです。キウイフルーツを植えました。つる性の植物は色々ありますが、藤にしようとか、藤は食べられないし、ぶどうはどうだろうか、ぶどうは虫がつくし、虫もつかないし食べられそうだし、世話もかからないキウイにしましょうと、27 本のキウイを植えました。

これがどの位の涼しい効果があるのかということ、私たちは学者ではないので調査は出来ませんが、NHK の番組に入ってもらって NHK さんが東京首都大学の三上先生に頼み込んでいただいて、この周辺住宅の気温調査を 2 週間して調査してもらいました。2 週間の調査の結果、約 1 から 3 位この周辺の住宅も気温が下がっているという結果も出ました。

一番初めに草が道路に面している場所に草がぼうぼうで、そこにゴミが捨てられ自転車捨てられ、ゴミ捨て場になっていた状況を、きれいにしてしまえ

「六町エコプチテラス」から学ぶ

ば、ごみを捨てる気を萎えさせる様になります。そこで、園芸部というものを作りまして黄色い菜の花、チュウリップを植たり皆で花を植えていきました。ただ花を植えるだけでは面白くないので、花のコンクールに応募して、1度は東京都地域職場の部・最優秀賞をもらったりしました。園芸部の人たちは自分のちのやったことが賞に現れたのですごく喜んでいました。

その場所にしっかりした活動告知看板を作ろうということになりました。キウイ棚を作ったりいろいろ設備を整えるのに100万円くらいかかりました。100万円のお金は当然ないので、地元のライオンズクラブの方々を中心にお願いして、一社5万円ずつの協賛金を貰いました。看板に「私たちは豊かな緑作りを応援している企業です」スポンサーを募り、25社で、125万円が集まり初年度に黒字ができました。

4 目覚めた自治への意識

私は基本的に、「こういう風にやりましょう」と、始めの掛け声をかける役をつとめます。私はアイデアを出すことができる。こういう風にやりましょうとか、こういう風にやるのだったらこういう方法がありますよという知恵は出します。実際に活動しているのは、円卓テーブルを作った当初と一緒に、誰かが「テーブルがあった方がいいよな」と「テーブルってどんなテーブルだよ」「中華テーブルがいい」「じゃあ持ってきますよ」ということで、どんどん1つのアイデアがいろいろな人を経由することによって、物が出来て来る。このようなやり方を私はモットーとしています。

園芸部の花いっぱいコンクールで、いろいろな花が集まりましたので押し花にしました。押し花でろうそくを作ろうということで、クリスマス用の押し花作りをしました。また、ヒキアゲハ救出大作戦といいまして、今の時期ぐらいになるとヒキアゲハが人参とかパセリとかの害虫になるのです。小学校3年生がモンシロチョウの観察をした後は、キアゲハの観察をしたいということで、害虫駆除対策で地域交流をということで、理科の体験学習をしました。

それから春になって菜の花祭りを開催しましたが、参加者の中にウクレレが得意な人とハーモニカが得意な人がいて、2人でバンドを組んで祭りのときに演奏しました。キムチ教室をしました。私たちのメンバーの中にキムチ作りが得意なお母さんがいらっちゃって、それならばこの場所でキムチ作り教室をやってくださいというオーダーを出してやってもらいました。キムチを作った方は分かると思いますが、キムチ作りをするといっても一番寒いときに白菜を塩漬けにして水気を抜いて作業をしなくてははいけません。2人分や3人分なら簡単ですが、講座の参加者は30人程居ました。30人分の下準備をしなくてははいけない。このような事も私たちはどの様な手順でしたらよいのか分かりませんで

「六町エコプチテラス」から学ぶ

したが、試行錯誤しながらいろいろな事を少しずつやってきました。

キウイフルーツが出来ると、毎年 1 回は剪定をします。実をとった後に木を切らなくてははいけません。木を切った枝が膨大なゴミになります。ゴミをどうしようかといったときに、メンバーの中にハーブ研究家でハーブリースの達人の方がいてハーブのリースにしたら良いだろうということで、クリスマスと正月のリース作りをしました。元々は捨てるはずだったキウイの剪定した枝を使いリースを作りました。

今はいろいろなキムチ作りやハーブリース作り等の話をしましたけれども、そうした事は私がやりませんかと言っているわけではありません。誰かすごく強烈なアイデマンがいて、次はこれをやりましょうという形で出て来たのではなくて、円卓テーブルにいつも誰かがここに座って、いつも誰かがお茶を飲んでいる状況になり、その中からアイデアが生まれました。先ほどのキウイのリースの話ですと、キウイの剪定師が「切ったのは良いけど、どうしたらいいのか」と言っているのが、「キウイの蔓だったらリースになるんじゃないか」等と、お茶を飲みながら雑談の中で話が出てきました。雑談の中で出てきた意見が、実行に移してみようとか、成功した、失敗したということになってくる。こうしたらよいのではないか、やってみようという形でどんどんアイデアが沸き出てくる状況が生まれてきました。

つまり、コミュニティーガーデンと区民農園の大きな違いを 1 つあげろといわれたら、この円卓テーブルがあったことがボランティア資質の潜在性を開花させたといえます。この地域住民の方たちは、ほとんどが歩いて 2、3 分の所で、役員 9 人、ネームカード作った人は 190 人くらいで、ほとんど毎日来る人が 60 人くらいいます。年間で一番多いときは、延べ人数 1 万人を超える人達がいらっしました。

ある人は 365 日通って必ず記帳して帰っていく。365 日も来るほど何が人を引き付けたのか。まず 1 つは自分の居場所がある。公園や図書館とは何となく居心地が違うという人がいます。外部から来た人もそうですが、いつも来てくれだけ長居をしても、誰も文句を言わない居場所がある。私が凄く嬉しかったのは、小さなお子さんを連れてくるお母さんが、ちょっと来て休んだり、いろいろな使われ方をして、多くの人にとっての居場所になっている。いろいろな人にいろいろな役割があるという事で、空き缶を集めるネットワークを持っている人は、アルミ缶リサイクルをしたり、音楽が出来る人は菜の花祭りで演奏をしてくれたり、自分がこういう事をやりたいというポジションを見つけることが出来る。

なぜならば、何も無い空き地から始めた時に、何に頼らなければいけなかったのかというと、人に頼らざるを得ない。「あなたは何が出来ますか」「じゃあ

「六町エコプチテラス」から学ぶ

これをやりましょう」「あなたは車を持っているけれども、車で運んでください」「あなたは木のトンカチを持っていますね」「あなたはお茶出せますよね。お茶を出すようだったらお願いします」「あなたはそこに座っていただけですか？座っているいろいろな人が来たら教えてください」と、いろいろな人たちにポジジョンを得る居場所になった。

それから好きな事が言えるし、聞いてもらえるということも含めて、すごくこの人たちは下町風のお父さん、お母さんですから驚く位に思った以上の事を言うのです。辛らつなこともスパッと言いますけれども、そこには何か悪口などはなくて、いつも言えて、また聞いてもらえる。あらゆる情報が集まり、「無理やり進めよう」とか「あの人が文句を言っていたよ」とか「あそこで安いものが売ってた」等、いろいろな情報がここに集まってくる。

ボランティアのみなさんは常に実行し、トライアンドエラーを繰り返す。「こういう風にした方が良いよね」という、評論的な事は言いません。「こういう風にやったら良いよね」と、大体はやってしまいます。やってみて失敗したら次はどの様にするかを考える。ここに座っていると、いろいろな人が外部からやって来てお話のネタは尽きません。

いろいろな刺激が入ってくるなかで、ボランティアさん資質の潜在性を開花して行きました。もう1つは環境というテーマがあります。私たちは先ほどお話したように、頭から入って行く様な話は中々聞かない。しかし、実際に行動をしながら自分たちで学ぶと言うことには、皆さんの同意が得られたので、エコ農園を利用してエコ活動をするという試みもしました。つまり、ナスが育っていくので毎日収穫しないといけない。きゅうりを収穫せず2日や3日間置いておくと、お化けきゅうりになってしまうので毎日来る。ちょっとしたキッカケにちょっと来る、ついでに生ゴミを溜め込まないように埋めて貰うとか、ちょっと家で溜めた水を持って来て貰う。ついでに、リサイクル用のアルミ缶で持って来て貰う。こう言った小さな行動が、ちょっとで出来る事を積み重ねていきました。

ちりも積もれば山となるのです、5年間に15.7tの生ゴミがリサイクルされ、9.3tの空き缶がリサイクルされました。これは1日で出来たとか、凄いネットワークを持っていた訳ではなくて、私たちの小さ積み重ねがこの様な数字を作りました。アルミ缶リサイクル隊長さんの場合、半身不随の病気をしてしまいました。人付き合いが苦手で、良い人ですけれども、とっつきにくいという人でした。

何かのきっかけでアルミ缶リサイクルを計画し収集する時に、何か自分の中で火が着いて「アルミ缶リサイクルを俺はやる」といいだし、何をやり始めたかと言うと、健康散歩の仲間にアルミ缶リサイクルのネットワークをいつの間

「六町エコプチテラス」から学ぶ

にか作って、近くの飲み屋さんから出てくる空き缶などを集めるようになりました。いつの間にか毎月200kg以上の空き缶を集める活動になっていました。

これはアルミ缶を私たちがスクラップ屋さんに売り、いくらかの金を手に入れ、アルミ缶は変動するので一番稼いだ時は、年間30万円になりました。年間に30万円も稼いでいる人はいなかったため、彼は一番仲間の中で尊敬を受けていました。彼自身もそうですけれども体が不自由であるかないかという事由はエコプチテラス活動にあまり関係ない事でした。体が不自由だからと言って守られるべき人という概念はありません。車椅子で畑に来る様な人たちもいました。老いも若きも男女も関係なく、色々な人が集まって活動が展開していきました。

先ほどヒートアイランド対策でキウイフルーツを植えたと言うお話をしました。キウイフルーツを27本植えましたが、私の対策の目的はヒートアイランド対策ですが、そんなことをいっても現場ではどうでもいいことなんです。何故どうでもいいかということ、実がなると皆の興味関心は「どうするの」という話になります。ちなみにこれは凄く実ったのですが、11,137個のキウイが収穫されました。

ここの教室の3分の1くらいが、キウイを並べて埋まるくらいの量です。この10,000個のキウイをどうするのかと言っているボランティアがいるわけです。そこで私が考えたのがキウイの地域通貨です。中心にかかわっているボランティアが毎月60人ほどいます。その中に色々なグラデーションがあって、凄くがんばるボランティア、そのボランティアにのっかかるボランティアがいます。そうすると何が起るかというと、頑張っているボランティアが頑張っていないボランティアをなんで頑張らないのかと問い出すのです。

これは凄く良くないことで、ボランティアはそもそも、いろいろなかわり方があってよいのです。凄く頑張るかかわり方でも、すこししか頑張れないかわり方もあってよいのです。いろいろなやり方があって良いのですよと現場ではいいますが、どうしても現場では汗をする人たちの方が声が大きくなって、それがやっていない人たちを責めるのです。そうするとやっていない人たちはどんどんいなくなってしまうという事が大きな問題としてありました。これはボランティアマネジメントとって凄く重要なことです。

それでは「がんばっているボランティアにどう接するのですか」という話になったときに、「じゃあお金をあげますか」という話になるかというと、これも少し違う。自発性でやっている事が欲になって、自分は時給いくらの価値があるのかというおかしな話になってしまいます。「お金を渡すのはおかしい」「何だったらいいんだろうか」という時に、たわわに実ったキウイに目がいきましました。例えば草むしりがあります。生ゴミリサイクルがあります。水のリサイク

「六町エコプチテラス」から学ぶ

ルがあります。会議の出席があります。いろいろなメニューがあります。

ボランティアのさまざまなメニュー全部を点数化しました。そのエコ活動をすべてポイントにして、キウイ収穫祭の時に1年間の貯めたポイントとキウイを交換するようにしました。こうなるとがんばっているボランティアは、がんばっていないボランティアを非難しなくなります。なぜならば、がんばったポイントが自分の実績になるからです。ボランティアというのは自立した個人が見返りを求めずに他人等に奉仕することという崇高なものではないのです。

初年度は、1位はBさんという、技術部でいろいろな施設を管理している人が87個くらい貰いました。2位がBさんの婦人ですけれども、B夫婦が独占して、155個くらいキウイを持って帰って行きました。私は15個で食べると、おなかを壊してキウイを食べたくなくなる数です。

10,000個のキウイが生りましたが、大体100人の人が40個を貰ったとしても4,000個です。残りの6,000個はどうするのか。これは本当に驚きますが、10,000個の内、8,000個くらいはその日のうちに無くなります。どうしてかといいますと、「アルミ缶をいつも集めてくれる　さんのような人がいる。こういう人たちにあげたい」「いつもお世話になっている　さんにあげたい」「いつもお世話になっているグリーン活動の協賛している社長さんにあげたい」「いつもお世話になっている学校の先生にあげたい」等、お世話になっている人がたくさん出てきます。始めは腐ってしまったらどうしようと思っていた何千個というキウイが、どんどん掃けていくのです。そこで初めて自分たちの活動が見えている範囲はせいぜい何百人ですけれども、ボランティア個人を支える色々な人達が後ろにいるという事がいかに多いのかという事が気づいてくるキッカケになりました。

感謝の意味を込めて、手紙に「一年間ありがとうございました。今年は何個取れました」と書いて、「頂いたご好意をキウイでお返ししたい。」「キウイをどうもありがとうございます。これをあげるよ」と返礼があり、「お世話になりました。ありがとうございます」という事がどんどん増えていくと言う現象がおこりました。

始め私は経営的にどの様にしたら良いかと悩んでいましたので、キウイを1個100円で売ったら10,000個で100万円だと考えていました。結局はボランティアの人達に使って貰うという事が一番結果的には良かった事です。ボランティアのやる気をそがない方法がよい。企業の場合は上下の命令があって動きませんが、ボランティアが難しいのは、「やりたい」と言う時が「やりたい」時で、「やだな」と思ったら辞めてしまいます。常にボランティアの意欲を維持しつつ新しい風をどんどん入れて行きながらボランティアのやる気や面白さを保つように場面、場面を考えていきました。

とはいえ、好き勝手にやって良いのかという事はないわけです。中には色々

「六町エコプチテラス」から学ぶ

な欲に駆られて色々な事をいう人もいます。その中でどの様に場を収めていくのか。

(注) 施設：エコ農園 55 区画 (年 5,000 円) 共同の農園

条件：毎月の全体会議への出席、各自のエコ活動の目標を設定

ボランティア登録料 500 円 顔写真入りのネームカード携行

部門：道路管理部、技術部、リサイクル部など

5 ボランティア活動の 5 原則

活動の五原則となる 60 点主義を提唱しました。まず始めにこのエコプチテラスの活動をする上では、5 つの原則を必ず守ってください。プチテラスとして適切かの判断基準を説明しました。

- 1) プチテラス活動 (公共空間) として適切なものか ~ エコ活動をする
- 2) あなたの活動は組織の目的と合っているのか
- 3) それは自分のためばかりでなく、皆のためになるのか
- 4) 予算の範囲でできるのか
- 5) 責任を持って最後までやり遂げられるのか

活動始めには、区民農園を使っている人達が入ってきた。これが凄く問題になったのは、区民農園は自分の畑をやるための物で、その文化に慣れている人は、「畑はやるけど草むしりはしないよ」という人達です。

そこでこういう人は利用しないでくださいと、利用制限をしました。「あくまでもボランティアでエコ活動をするための場なので自分の畑をしたい人は、区民農園へ行ってください」と、厳格に分けました。色々な人達の思いはあったかもしれませんが、役員の前ではエコ活動をするという宣言をしていただきました。利用は 1 年間で、ずっと更新は出来ますがエコ活動をしますとの宣言を紙に書いていただきました。

組織の目標とあっているのか。「私たちのプチテラスはあくまでもヒートアイランドや環境問題を身近に考える為のものですよ」「環境問題はなんなのか」というのは、それぞれが考えればよい事ですが、「なんとなく、環境問題のことをやっているよね」ということは合意してくださいと、そこが組織の目標となる。何か自分がやろうというアイデアは、自分だけのためではなく皆の為にもなるかどうかという事です。会計さんがいるので、予算の範囲で出来るのか事業計画を作って収支がその範囲で出来るのか。「やる」と言った人が言いつばなしではなくて、最後まで責任を持ってやり遂げられるのかどうか。この 5 つだけを厳格にチェックをしました。

例えば、自分でやりますと言った事は多少の失敗があっても、基本的に許す。失敗を許すことは重要で、ただし同じ失敗を繰り返すことは許さない。始めは

「六町エコプチテラス」から学ぶ

70点でしたが、70点だと守れませんでしたので、自発性の喚起と成長を促す60点主義を掲げました。

ある時この様な事がありました。ウッドチップを道に撒く前に話をした時に、ある方が「私の会社に大量の廃棄カーペットがあります。そのカーペットを使いましょう」と言いました。ここに敷いてあるカーペットがそうですが、私は「このカーペットがめくれたらどうするのだろう」と考えました。しかし「いえ、大丈夫です、めくれないように杭を打っておきます」「お金はかかりません。わたしが最後まで責任をもってやりますから」と言うので、皆でやりましょうと円卓会議をして決めました。実際に敷いてみて何が起こったかという、カーペットにつまずいて転ぶ人が出てきました。

私はそういう事もあるのではないかと考えていましたが、ここでの原則はアイデアがあって予算が無いから自分で責任を持ってやると言ったら皆で協力するというやり方です。失敗したのを見て、円卓でお茶を飲みながら「あそこでつまずたよ」「じゃあ あそこは変えましょうか」という事でトライして失敗し、それを許し、次はどの様にしようか考える。

自分だけではなく皆の為になるという事を常にお茶を飲みながら「みんなでこれはいいよね」という声で一致したら実行してみる。声が聞こえなかったとしても、必要だねと思ったことはとりあえずトライさせる。5つの原則にのっとったものは、実行していく事にしました。何故にこれをやったかと言うと、自分の意見が良い意見だろうが、悪い意見だろうが、取りあえずやってみるという事を皆で受け入れることがボランティアの次のステップに進むやる気になる仕掛けです。私たちがボランティアのやる気で活動の全体が支えられていくためには、絶えずどんな失敗も許すということが重要だと思いました。

自治という言葉がありますが、自治への意識という事もだんだん芽生えてきました。始めは「あんな土地は畑にしちゃえばいいのに」という意見がありました。自分も自由気ままに畑をやりたいだけだけれども、私たちが自分たちの手で耕した空き地があって、手弁当、自腹でやりましょう、地道にやりましょうと開拓してきたエコプチテラスです。そのようにして出来たものは、本当に私たちのものです。「私たち」とは、どこまでが私たちなのかという事を認識するようになりました。

始めは考えていませんでしたけれども、ここの土地に何故たくさんの方が来るのか。何故、私たちの活動は面白いと言ってくれる人がいるのか。色々な人達が来ると、だんだんと自分の意味付けで分からなくなってくる。確かにこの土地は私たちが汗を流して作ったかもしれないけれども、元々は区画整理事業地で足立区が所有している土地です。区民のお金で区民の財産です。

「六町エコプチテラス」から学ぶ

もちろん私たちボランティアも楽しむけれども、行政や地域の人たちとも共有していくことが重要なのではないかという話が出てきました。エコプチテラスには、子供の参加者がたくさんあります。普通は、畑に子供が来ることはタブーなのです。畑で子供が来ると何をするかというと、大体は芽をつまむのです。ボールなどで追って野菜の枝を折って、荒らしまわることが多いので、60歳台、70歳台の子育ての終わった人達で子供が来ることに毛嫌いする人達もいました。

ジャガイモの収穫祭のときに、収穫したジャガイモでふかし芋を食べる。「皆で振舞う時に子供たちに、お父さんお母さんが付いて来て、お父さんお母さん達がジャガイモを食う」と言ってボランティアが怒るのです。気持ちでは分かります。「私たちはずっと土の手入れをしてきたのに何故、収穫祭の時に子供の親が来るのか。お前は何をした」と怒りました。この問題は凄く難しい。難しいときにどの様に解決するか。例えば、足立区内のイベントを流すコミュニティーチャンネルのケーブルテレビに、「コロッケ畑のジャガイモ収穫祭」取材をしてもらい、怒ったボランティアさんにインタビューをしてもらいました。すると、「いいジャガイモの収穫が出来て、お子さんたちにも楽しんでもらえました」というわけです。ケーブルテレビ側は「子供が来ないと絵が取れない」と言うので、「やっぱり、子供がいたほうがいいですね」と、完全にだましですけども、だましながらコミュニティーガーデンでは誰もが必要とされている事を少しずつ経験から学ぶようにもって行きました。

私は50歳代から70歳代の方たちの子供の世代で、実は一番私が短気で我慢できなく一番理想的なことを言う。ある時、こういうことがありました。アルミ缶リサイクルで初めて150,000円位集めた時がありました。皆さん春や夏はいいですが、さえぎるところが無いので冬は凄く寒いのです。15万円集まったのでビニールハウスを買って建てましょうと言う話をしました。「ビニールハウスを建てて、全体会で皆が集まったときに名前を決めましょう。例えば空き缶の収入で建てたから、看板を作って空き缶ハウス見たいな感じで、皆で名前を決めて看板を立てたらカッコいいじゃないですか」という話を前日のお茶のみ場でしました。そうすると次の日に「空き缶ハウス」という看板が建っていました。

私はそれを見て頭にきてしまい、「違うじゃない。みんなでがんばって空き缶を集めてお金にしてみんなで買ったビニールハウスに名前をつけるのは皆でやる作業じゃないの?」という話をしましたが、「お前それは正論だけど、もう看板は出来ちゃっている」「お前それをやめろというわけ?」「そんなわけにいかないだろう」という話になり、結局できた看板をそのままつけました。

私自身も自分の理想は掲げますけれども、正論だけが正論で通る訳ではない

「六町エコプチテラス」から学ぶ

のです。色々な人が自分では正しいと思っていることであっても、急ぎすぎたことを言うと誰かが止める。皆がそれぞれカバーし合いながら、1つのルールを作っていく。円卓テーブル会議は加速する。試行錯誤することで感動があり、いろいろなことがぐるぐると回っていき、トライアンドエラーにより時間をかけながら、私たち自身や私たちのグループに知の集積が蓄えられていきました。皆がそれぞれものを言いながら、知がストックされていて、どんどん形を変えていく様な事が重要なのではないかと思います。繋がって行く、積み上げていくという話をしますが、私にとってはコミュニティーガーデンというのは、巨樹のような存在だなと感じました。つまり、人が人を集っていく形で、苦楽を共にしながら繋がって行くプロセスが重要で、時間をかけてどんどんと新しい価値が生まれて行く。それは何千年も生きる巨樹ととても近いのではないかなと思うようになりました。

6 エコプチテラスのコミュニケーションデザインの手法

この活動をもう少し、他の事例に応用できないのか、プチテラスコミュニケーションデザインの手法を組み込んだ活動の場を作れないかと考えました。たまたま私の父が所有している築40年で雨漏りしていてドアも開かないし、住んでいるだけで少し危ないというアパート物件がありまして、その物件をどうしようかという相談が父からありました。コミュニティーガーデンで培った知の集積がなされる様なコミュニケーションを実現するエコアパートという物が出来ないかと考えました。

現在住んでいる住民の方たちがいます。各世帯に4坪くらいの畑があります。各畑が台所と繋がっていて、室内2階建てです。農的空間があり、コミュニティーガーデンと同じようなことが繰り返されています。これはいくつかの特徴がある中の1つで、畑を並べたので垣根を作りませんでした。垣根がないので隣の敷地へ行き、同時に住民同士が顔の見える関係作りに効果がありました。人と人が植物の壁によって遮られるのではなく、コミュニケーションによって解決して行く形を作りました。

共有スペースの中に自主管理を促す仕組みを建物の西側に、即ちベンチとテーブルを作りました。これはコミュニティーを住人同士が自立性を育てる為に必要な舞台です。住民同士がコミュニケを取る動線です。2つあって1つは普通は玄関を北側に置きますが、南側に置きました。つまり、必ず畑を通らないと家に入れず、畑を通らないと家から出られないという工夫をしました。必ず西側の所で1つの動線が繋がる。プチテラスと同じように、必ず人が出会って「おはようございます」「いってきます」そういった何気ない会話から始まり、「スナックエンドウが多く取れちゃったからたべませんか」「ブラックベリーでジュ

「六町エコプチテラス」から学ぶ

ース作ったけど飲みませんか」「どこそこに行ったお土産です」という様な事が自然と広がるような設計の仕組みになっています。

もう一つはエコプチテラスの時もそうですが、共感の仕掛けということで、ブログを公開しました。エコアパートの四季や出来事等をブログに載せることによって、住んでいる人達が共感できるし、情報を共有できる。

普通、住まい手とオーナーとの関係では、家賃がいくらなのか、交通アクセスはどうかということ、利便性との交換関係で家賃などの条件が決まります。経済的なところに重きを置いています。住まい手からしてみれば、安さと立地と日当たりといったところでしょうか。

エコアパートが提供しようとしている価値は、プラス環境配慮はどうか、排出されるCO₂がどの様に削減されているのか、使っている材料は環境負荷が少ないのか、今日のテーマである地域社会の関係性はどうか。このような価値が加わります。

この間聞いた話では、今のシングルワンルームの中では、不動産屋さんによく、隣に挨拶に行かないようにアドバイスされるそうです。隣に誰が住んでいるのか分かると、それだけ危険だという事があるようです。そうではなく地域と顔の見える関係になる、ある程度に分かっている関係にして行こうというのが大きな違いです。住んでいる人の中に赤ちゃんがいるお宅があります。赤ちゃんが顔も分からない、名前も知らないとなると、赤ちゃんの鳴き声も騒音に聞こえます。ところが名前を知っていて、顔分かっているとちゃん「泣いているから大変だね」と騒音が騒音でなくなります。

地域と社会と環境とのバランスを重視しながら、エコプチテラスのやり方を参考にし、エコアパートという建物で「人をつなぐ」をテーマにしています。私がエコプチテラスという事業をやって一番に感じたのは、「いい町ですね」とか「町に魅力がある」という価値を作るのは、いつも人ということです。その人というのは、今日の皆さんもそうですが、凄く潜在的な様々な可能性を持っています。もしも、それが発揮されないとすると残念なことです。それが上手く結びつくような、つながるようなキッカケが大事です。

参考サイト：

1) グリーンプロジェクトWEBによろこそ：

<http://www.greenproject.net/modules/news/>

2) 足立区六町エコプチテラス事業の実績と評価

<http://www.city.adachi.tokyo.jp/006/d08100014.html>

3) 地球環境パートナーシッププラザ (GEIC)

「六町エコプチテラス」

<http://www.geic.or.jp/geic/partnership/casestudy/064/index.html>

「六町エコプチテラス」から学ぶ